



古帛子

礼正
十

5
1439



あなをいふはしるしをあらわすに
生もあまの能くはるはるの
るもあまの能くはるはるの
いふはるの能くはるの
半あまの能くはるの
あまの能くはるの
いふはるの能くはるの
あまの能くはるの
いふはるの能くはるの
あまの能くはるの

すまをいふはしるしをあらわすに
あまの能くはるの
いふはるの能くはるの
あまの能くはるの
いふはるの能くはるの
あまの能くはるの
いふはるの能くはるの
あまの能くはるの
いふはるの能くはるの
あまの能くはるの
いふはるの能くはるの

幸し事録の休れ死すしと播の
 器もあらず多子蕉門徒と号
 して法を習ふ武を将作舞
 予晋子の門は傲しおの祖父母
 のことと云ふまんや全同志のまひ
 とまひと云ふしんと守唯おろしく
 其義録の詞ありとあるに

享保九甲辰仲冬

越之後州濱陽処士

と虎角



Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

一他語といふゆかり半を云

和歌乃一休小他語の若らまき想方といひ旋返せ
といふ思ふといふことと一字義の多解古来結流
枚あなれを採くといふるは思ふゆかりとてく歌乃休と
又るなり一他語を云れよ考るなりと詠いぬひ或は歌
乃去はま歌源の他語とす一利はなとて一考るゆかり
中と古今ふるるの他語おもひの他語ゆかり法く
律りゆかり一ゆかり

あまふ人の心は海と云ふは思ふゆかり
いふを法おもふきんあふゆかり

古

日

新也一又ふもかぬ人をふおつまふ班を那
ひく南苑も僕なふぬうーかれゆんを内法
の人強うなるふと又指合の事能うなと少一
執筆法を人色ゆんさなるめ指合に昔者の書成
及一とう翁の風韻の達人をれ一字の上は不意の
情を味ひ法不拘ううとをや出るとゆつを格別の
意不成り若る乃をを成りさぬ不字一くなる
半をか一と法いゆくす方の理さ白の如くは海
とせ度まらと書海務ふ付く能得作の外に能あ
るうとく能の仲れ能を是もうーかきんかうとて

たぬ

九

和一きう作とらあへ一書寫の老衣をの考り
双六うとせきうをと漢氏一初の程をふると之を
の真を信と事鬼神をも居らると上下和睦
一一人我をそたれに飲た力本流也漢と身成
ゆらせんとするに能きと一死の本和の飲人能信
む一一人能いおぬふもと法後ともはる法例を
是とすると此の王献の爰中ふ物をも物ふ一聖と
るると能うもめ也又和能ふのしある詞とと詠
せうの内教あはると古もと句をひて是方うと人
をひくと業ふと也と能ふに一死の本流也漢と身成

五

九

白あり内書あり後人為書白くくま何事
をまうんや宗道に在る源範をまうん
小味くくくくくくくくくくくくくくく
怒りありて能人をあまうまうまうまう
舞の娘と源範事まうりくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくく
まうまうまうまうまうまうまうまう
切なきを宗くくくくくくくくく
まうまうまうまうまうまうまうまう
おあつま宗其入のくくくくくくくく
まうまうまうまうまうまうまうまう

宗法作

書之の筆の白くくくくくくくく
入のあまうまうまうまうまうまう
形武海人の時何事何事何事何事何事
是くくくくくくくくくくくくくく
今くくくくくくくくくくくくくく
ゆりくくくくくくくくくくくくく
のるいあ合あやうまうまうまうまう
ゆりくくくくくくくくくくくくく
心を捧之眉をいそまうくくくくく
まうまうまうまうまうまうまうまう

道なきくくともされさきこ望めうひ若所ん
或方去小只正風骨をなとま一古今此處なる
事さくくははまくとよふ是ありとぬま事成
りまよ一也ハ云也とゆま方をあり所を安あり
よう風雅の知識をたけは侍をたふ事能く
まま一し作侍のう所人ハは事ふと味うる若
年乃疑惑一時乃侍ふひひ出ゆるとやあつく若夫
一巡乃若行向乃羽子とよふ氣源流はま標地流をひと
とま一知るとし理をそ一と危う形をまま一と林
佛佛若莊乃榮衛をたると敏うらと逢のこは海とま

直取かまきり所あり只流流乃氣をまよ今佛流まとら
直取をるふとゆ慈と知るハ而小三をひと論はまし
て力小初をそわさ低くしてまをせりとはを佛作藝
やらまとう又ありま日乃若ままを枝流をままと懸
知小流金す事らと乃流ま一あま如くハ其まと乃
やを斜取しとま石ま合場小氣を賊と相あひのん
ともゆらまを一症をるひと一ゆら事申一乃流まを
流まかなま流ハ馬ここが流銀乃風流まとく流く
と流く流また也と流老乃いこく流乃流をま人
つる人流流法所一教乃流事乃流ま小只とま事流後

を邊りては考るる月も我づく運去にまゝなるを
お祖乃の母の佛に月めふ人々を教へゆるさく
教へを乞ふらん きたるや秋の邊りとならざる
と仰る又お祖乃を教へるをあらうけしとて きたるまこと
お祖乃に先たぬふいと前てを次と曰教へて
教へるといふ教へるを起るともなりけりてを可成
能遠くともいふ事ごとく中をいふ事ごとくや故の佛
ややう一人の安楽の位に居るとも其居れお祖
おくをまゐるといふことの中にお祖のくを下にお祖
よふまゝといふ道をたるとも教へて一半年はあつたや人の

たは

十五

安楽の事ごとくお祖乃の事先部ゆかり又お祖
事のお祖を身をもつともすといふこと云はし一お祖
よりお祖をたともあつて一お祖をたともお祖の部
お祖といふ事あつてお祖ありお祖乃のふ月お祖
くといふ事ごとく 一お祖乃月をくといふこと
お祖とお祖をたつてお祖乃の事先部ゆかり又お祖
一お祖の月をくといふことと云はしと云はし一お祖
や油をたつてお祖乃の事先部ゆかり又お祖
一お祖の月をくといふことと云はしと云はし一お祖
お祖とお祖をたつてお祖乃の事先部ゆかり又お祖
お祖とお祖をたつてお祖乃の事先部ゆかり又お祖

たは

十五

一付方小撰骨の作と申す事此中あり

此物初後八十件秘傳大伴之孫作也亦所傳
昔の格ふと事小付向中く公病あり或人
相圖載公一傳この類と申すこと何んを言ふ
原記やと存中や一に悪て定か一孝と云ふ方
の事と聞ゆると蓋のち秘の事と云はれん人小
やうしく受けきく方と云ふ所をなと云
好く海くり事と云ふかけの事一いふ事
と一じさなれを何の事や云ふと云ふ事
夢ひ也と蓋のふらうは祖と云はれり

一色二白く持ち申す事古来所傳流ふと云ふ事
おし一様紙小足といふ事

甲子無事乃句教者乃人知解一お向ふ無乃句
お事れと無乃句向も付も因り

かゝる事乃限ありけり自乃事なると云ふ事
此乃句とくといふ事乃月日と云ふ事乃
かゝる事乃ひな事乃事乃事乃事乃事乃事乃
無乃句乃事乃事乃事乃事乃事乃事乃事乃
おと三月を乃事乃事乃事乃事乃事乃事乃
おと事乃事乃事乃事乃事乃事乃事乃事乃

右段

左段

むゑ乃のりまきうゝゑ乃布を思ふる句とる

るゆともみ程はるまきり とらふ 二一とる

おのゑはふを思ひてとたうそゑのぢをふ

ゆらと ちふふゆらちやうゆらんとゆらふ

ゆらも、ちふふとちふふとて 又 ちふふの

ちく乃を思ひしとらふ ちく乃も思ふと

ちひゆの二葉あそく ちひゆの句は思ふを思ふの

ちふとちふの思ふと ちふ先たふと人の思ふ

ちふふのこころも思ふ先とちふふの思ふ

ちふふの思ふも思ふ先とちふふの思ふ

かゝるはの思ふ ちふふの思ふとちふふの思ふ

哀傷よ、思ふ先とちふふの思ふ

ちふふの思ふも思ふ先とちふふの思ふ

ちふふの思ふも思ふ先とちふふの思ふ

ちふふの思ふも思ふ先とちふふの思ふ

ちふふの思ふも思ふ先とちふふの思ふ

ちふふの思ふも思ふ先とちふふの思ふ

ちふふの思ふも思ふ先とちふふの思ふ

ちふふの思ふも思ふ先とちふふの思ふ

ちふふの思ふも思ふ先とちふふの思ふ

公彦とて古今ふ

日本書紀の事とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事と

又後成心の方ふ

其地とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事と

河合の候とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事と

一位とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事と

是能治乃不ろ味こと中半はらる

一向初心の論中とていふ事とていふ事とていふ事と

聖書乃至忠小沈とていふ事とていふ事とていふ事と

然らばとていふ事とていふ事とていふ事とていふ事と

相小とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事と

雨ふとていふ事とていふ事とていふ事とていふ事と

一兆の位とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事と

伎藝とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事と

榮耀の位とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事と

又此とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事と

教訓とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事と

乃海をさるとていふ事とていふ事とていふ事とていふ事と

とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事と

ん乃ひさくとていふ事とていふ事とていふ事とていふ事と

...

...

白化子系松葉少く竹ん格あの中坊れを百餘
原 支山系漢のいしくなるらん 系

清まよふ水海の浦小日乃をぬくと背

又 竹方も志ぬ長中葉格のしと

定あな証力の何念のうらん 系

仕るれし令ま似する草乃為と竹

又 まこおひと令ま似ぬ草の身

ゆくの字かれ任らん 系

卯花の咲もぬぬれと守 昌程

い白字序感して執筆憶紙云物んをい小

昌程老人とのまをむとゆとをいかなの身選と

うり形と人しく洞をしく中昌程存幣し

葉しと又卯花乃とぬ文字執筆わしとせ

し小塚存まき重しくうよ中竹まけ家と

卯花乃れどもぬぬれとまを格あ

修と修乃有る証年あり

一社日教入彼存もまを秘ぬ及ま物直る等

皆付向ふし道ま其支秘よ如申あり

社日教入彼存も秘ぬ及ま物直る等

まよぬと教向ふする常此事(想)と書を

定考一牛一書在ひく此秋実を結ひ其種を
据の類并よ生れあつた由を草子乃後すり
祭祠法舎年申此人半諸虫の本後法よ
どうほ乃君月も月と申云て十二日の者句
あら七月恐を所幸位のおも秋をなす
去其意と本とくさ物多し此の事を結ひ此
の季にちる半句端こり居ゆ居丁乃名秋名
去よりく丁と申し秋と考とく去乃去に秋
乃句よ月建ゆるとく月丁名乃秋有する法
所一秋又ほ名教入會等の秋有る居ると

瀬沼杜若此所申す小あわの風竹向ふ川家へ
比や八朝梅を去梅と申す下梅と申す去らる
梅探る小冬也官中乃梅と云起も去乃秋とく
ころゆき杜若の去より候候れと其の物類も其
も去らるく秋去の七月漸くとくも也下小冬乃
季のし去の去ふとくと惟子八月申去す去
秋なれと其也又官小卯秋竹系半去連
去小冬なり去を所秋小卯秋ゆれと官ハ
冬卯也其去もと通す乃去ハ又月晒る也
時をゆとよ矢りて秋と初冬小冬は去の去こ

去
去
去

自在にして其力を盡さずんば其の徳は
尺乃極るやと云ふ極をゆう也一其の
て其の徳を盡さずんば其の徳は
其の徳を盡さずんば其の徳は
其の徳を盡さずんば其の徳は
其の徳を盡さずんば其の徳は
其の徳を盡さずんば其の徳は
其の徳を盡さずんば其の徳は
其の徳を盡さずんば其の徳は
其の徳を盡さずんば其の徳は
其の徳を盡さずんば其の徳は

人徳を是より其徳のなりははるるなりは
其徳を是より其徳のなりははるるなりは

一或他徳去し其徳は人徳を盡さずんば
尺乃極るやと云ふ極をゆう也一其の
其の徳を盡さずんば其の徳は
其の徳を盡さずんば其の徳は
其の徳を盡さずんば其の徳は
其の徳を盡さずんば其の徳は
其の徳を盡さずんば其の徳は
其の徳を盡さずんば其の徳は
其の徳を盡さずんば其の徳は
其の徳を盡さずんば其の徳は
其の徳を盡さずんば其の徳は

七六

七六

伊勢の行例を誘ふ所なく事をもかきぬあり
怪我をくさし用を也録上にい所一録下にい所と
蓋し一六五種に大やう馬の念をありて古まをん
か所法を馬のりいしくこのつとんからなる所と
大勝の中少く心志をられゆつ法をたふれり
たうとありし是等の事之風俗の中を
只争ひの能く場を事をもさすく情を誘ふ
半のりあたる

一蕉門の他籍の接投かとも事法してや中
教のやと接ふまいし一と事のひり

古本を教の事と接しり事法を何の事
少く接投の内よことなり法をたふれり
何れと文章力の法也知く此も只自欺を知せ
てなまの味一花道と接ふの法をたふれり
きり事法と用ひとわし海の法を接投と
初宅の難ふととらわれ接投ととるを或人
世わらうの事法に他志一か法は別ふ

りともありたる又も所ふ

ととりし法を接しり事法を何の事
論少くむを接しり血を必調をばるる

死に候ふはまゝの事なり

養正作襄老卿部子のまゝの御事なり
夫子の御事なりと申すは御事なり
の御事なりと申すは御事なり
三原の御事なりと申すは御事なり
足利の御事なりと申すは御事なり
の御事なりと申すは御事なり
か母の御事なりと申すは御事なり
乃の御事なりと申すは御事なり
おの御事なりと申すは御事なり

下から上へと申すは御事なり
何れもやと申すは御事なり
もう御事なりと申すは御事なり
一と申すは御事なり
の御事なりと申すは御事なり
と申すは御事なりと申すは御事なり
道理を申すは御事なり
才子流を申すは御事なり
心ありと申すは御事なり
又定家の御事なりと申すは御事なり

三

よみ人此後傳の字様とく別人なり也此後此後
心も歎きまふの慈しく通力自らとらねし事を
どうとく相まのこくも此後此後此後此後
わら此後此後此後此後此後此後此後此後
此後此後此後此後此後此後此後此後此後
此後此後此後此後此後此後此後此後此後
下子此後此後此後此後此後此後此後此後
と此後此後此後此後此後此後此後此後此後
此後此後此後此後此後此後此後此後此後
此後此後此後此後此後此後此後此後此後
此後此後此後此後此後此後此後此後此後

文者也君子に思ふからとてや一杖一履とらぬの
此後此後此後此後此後此後此後此後此後
一七又宗榮居士も本年も此後此後此後此後
予者此後此後此後此後此後此後此後此後

此後此後此後此後此後此後此後此後此後
此後此後此後此後此後此後此後此後此後
此後此後此後此後此後此後此後此後此後

此後此後此後此後此後此後此後此後此後
此後此後此後此後此後此後此後此後此後
此後此後此後此後此後此後此後此後此後

此後此後此後此後此後此後此後此後此後

我は此の世に生れつゝとて此道もも入ぬとて老死を能
得る事をはかすらん御終一はせりといふ事終極と
打ちつゝとて定まらん老の世も終極と云ふ所のありと
ま終極といふ所のありと云ふ事終極といふ所のありと
得ん物りもなり只此世の物りも変化一動靜を
そて常といふ所なり是は終極の事なりおちりま終極
得ん所の信務をも持たせし下終の耳も入ぬとて
は終極といふとて中もま終極と居るの目も終極といふ
香神といふといふ所のありと終極といふ所のありと
戲云といふといふ所のありと終極といふ所のありと

夫は巫匠の老といふも又志を立るる術終極といふも
と終極といふといふ所のありと終極といふ所のありと
のま終極といふといふ所のありと終極といふ所のありと
告終といふといふ所のありと終極といふ所のありと
終極といふといふ所のありと終極といふ所のありと
終極といふといふ所のありと終極といふ所のありと
終極といふといふ所のありと終極といふ所のありと
終極といふといふ所のありと終極といふ所のありと
終極といふといふ所のありと終極といふ所のありと
終極といふといふ所のありと終極といふ所のありと

終極

終極

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

虎角

きーあーともやまーとまろの紙ま

人いんせいのまろふがゆり花 依水

たふふちまろの紙まろのまろく 自矢

きーふちらーとまろのま 百合

日のおれとまろの紙まろのま 又咲

えんをうらまろとまろの紙まろ 佐甫

た
85

栗

あの人ことろもさうせうに疾の者自來
酒の酒のあ身ひ燕 葵
入る量二人の守かひあんと 鹿
口もふりあをさしたる 角
と年ハ涉身より少中なま 水
まやこもあらふ宮より 笑
味も酒屋に名をやらせりとお 合
隣と行はせいかんさく 咲

夕雲乃月がさうりよりいふに
節もあましくうそをいふ 示
新茶の下は素直の茶仲間 了
虫をけらふく喧嘩ふいせぬ 睡
兄ふりふ力者のりかた 角
文と書きたる二十一日 水
寺への入相もたや持あつく 笑
あ馬さるる男士の徳を 合

頃、下へくふ林、赤いしをき
咲

厚いとうくと、尾をわが
佐

彦浦まきく、白く、空の音、音
了

琴のいろは、れぬ、こ、空、あ
了

子あう、く、ち、あ、この、例、し、を、流、い、と
睡

む、い、う、い、る、金、の、あ、入
角

宿、ま、あ、足、訓、し、月、の、影、あ、ひ、く
水

相生、町、と、所、ふ、吹、あ、り
笑

積、と、ま、ま、て、枝、葉、く、と、ま、ま、密、林、あ、り
合

の、陰、う、ら、も、ま、ま、あ、と、い、は、ぬ
咲

か、ら、く、中、こ、所、く、ま、ま、あ、り
佐

神、輿、乃、の、ま、ま、あ、り、神、宮、達
示

目、代、の、ま、ま、あ、り、ま、ま、あ、り
了

ま、ま、あ、り、ま、ま、あ、り、ま、ま、あ、り
睡

七

七

其辭

自笑

名樂やうりくも鳥居跡の敬卓

送竹のやうふらうらひと夢

暖氣定ぬせふがたらまきと百合

ゆももーまきぬ相話をする俵

月の秋うらもおぬ御四屋又咲

とあふらうらまきとせもの丁庸

送物とて標ふがまきとあな祭也了

只福今うらに僧心の世々笑

一里竹とて送るまきと茶のさびえ水

わーまきとて山お出ス合

死ぬといふはいまぬぬと痛うら角

瓜とてお子も今とけりるえ咲

掻きけふとて盆力の秋涼ー笑

あ乃の庭よとて垂り焼了

亦のほくろきり、所のまゝを合

樽とすく、失所、門のいそみ水

と命とつろ、水のちう、笑り

日和のほく、を散らたら、角

智苑、若く、竹や杖、の釣、雀、了

わの、氣、小、衆、の、後、も、世、中、笑

吳、母、守、り、右、を、も、無、い、合、点、と、く、水

藤、今、と、居、こ、と、年、の、う、さ、こ、合

戸、の、空、を、駆、け、と、海、ら、く、か、も、又、角

こ、ろ、終、を、誘、り、海、の、き、と、ん、笑

と、糸、の、木、の、坊、ま、と、く、と、株、の、松、笑

と、こ、い、花、を、月、も、さ、り、死、了

何、出、る、誓、と、お、ま、い、ま、の、り、あ、を、合

借、後、は、と、ま、の、海、の、力、の、り、水

い、と、と、り、所、の、八、卦、も、彩、ま、れ、と、笑

似、ふ、れ、と、い、ひ、ん、と、い、ち、お、り、角

藤

角

祝星まらりけりる庭根雪踏了
 ちう柳の庭ふちう侍の 笑
 白月のしらおをせんと馬のよれ 水
 尾ね軍のな漢も世を 合
 極楽のなをすねららぬ方ち 角
 年迄音のそふと人 咲

表

鳴のよほこの書院の奥くまそ 晋乎
 達達東ふささやの海のらの夜 翁
 ちきくや音の志をれ知らわす 伴桂
 七草やちあつさふ痛りの中 其巖
 七草やちあつさふ痛りの中 三葉
 七草やちあつさふ痛りの中 毒草
 常ふちと竹のね起るま日小 芥
 居風各のゆれおよ寄るや窓を梅 黒凡
 而ゆく常の庭に戸のそふ 素後

七草

七草

昔や嵐ちらりり 経度のは海 晋子
 一洞子とてくもる金さう 梅の恋 鳥皓
 白梅のちとこ乃の白の空の如 城世
 言流と隣河のなや梅の如 江臨
 織の白梅のこころも花の如 龍臨
 花よの梅枝のさきり梅の如 春草
 花の乃らもよもよも一花の如 春草
 年々ぬ梅の香の如ぬ屋の如 忌一

梅月漢

一季乃今も白く一花の梅 自笑

長風吹掃去る花より柳の芽 楚雀
 如とゆい花あはれや雉の声 花菜
 水影ふるいあはれ花の雀 自水
 旅人とうとせまきり知ひる 碩未
 神鳥とて雀も下り味 自承
 去る乃の露も花も叶の如 沙名
 人乃乳もどけく眠るも去乃の如 慈行
 去る乃や汰乃るを花の青老人 池柳
 弱らせと松の何なるも去乃の如 又咲
 去る乃やお花乃の如も梅の如 百歩

古歌

四十七

新由の草まのなやまの面
五つとく様も目といく柳ト 佐用
苗代を雨の下の田ト 凡
ふらの蓋すふらぬ田ト 百合
風乃を此日とくひとく柳ト 凡
少う神ふかきまる水乃柳ト 安女
昔乃目とせうとく病の柳ト 千再
合乃のふと袖を昔ひとく橋ト 山似水
おちりやいれちうの道とく 安治
依此表の相留しちのあか減 和庸

まの乃まや紙をそらぬ物乃紙 夢
沈字のりくとくふとく此去乃海 席睡
縦衣や殊とくふとく人乃まと 其之
むとのりて不従ぬりてま乃原 夢中
勝ふ養雲かてしてはいと密のね 和凡
一乃八すこまきまかなくははるる作 一草
涅槃をまや乱れとくる裸沈 村松
弓をり乃縦をりやあ乃うと 長夜
稚子ひくとくあ乃ぬとくや初橋 呂竹
舟由の漆身とくやとくのさく 仙枝

五

六

雲ととも白のひの糸さくら 休禱
能花や入日の跡をけしと 夏
去の衣や梅小ちくむつらと 龍
花らうとく霞きふる名歌と蝶下 岩
心より立ちぬあ女やまのの者 早
奥乃の心を嘆くをせけりし海傍 不
物移ふさけくゆふやあはれ 野水
麦とともや壁心とくたりあはれ 隨之

麦

仙人とあ繁ふなを死るあはれ 夏
道中ハ草花かりやし修とてうえ 止教
卯花や 是怪所ハ夕月夜 一眠
卯花や 火種やうし此花を乃西 寄枕
持くかく南や田舎乃文字文余り 鷹
短人乃結ひ日の跡をあな来 江
於や 鬼と十八のあを来 祝
麦乃種小弱うて足ぬとて 木 羅
虫つゝあ浪雪ふらう人かこさまで 晋子

竹花小痛くおろしとふりて守 長為
何う好耳をあらうおほほとて言一字
そほや園一ふのやもまを 休用
氣そくや字ふくやふとて守 正装
弁心乃名きくやまふ外 云 東器
麦乃茶の思と付くやなとて守 山字
何と下、おろしとて守とて守 芦江
金拾ふ麦乃のりおやほとて守 紫睡
梅花くまらるる竹花 不及
家重後もたるとて守 烏皓

あ架小竹乃子取く踊る江器
竹乃子の板後を移ふ社コイタの如 保晴
まはるくまはるく涼し竹乃風 老耳
振舞ふ下く歌ふ竹花 巴流
草乃実よふなり其ふ様三条 斥睡
おめあくおとこよふの像三条 羨弱
湯のうらやめおは流るる流天の如 笑山
まらおはとて守乃子も昔百合
志のあふ目も風はるるのり山子
よし女の法合終め休用自笑

男をとりあし女とよま田う下 枕
浅きまかぢを金指し田う下 正衣
履のぬくたのる書指や夏の秋 器
手引く世にうあう人妻乃秋 喜
祖のゆれお子乃秋の産下 所用
毛の者とある乃る書や茂き湯 後湯
池も指とある乃秋指乃杜あ 自扇
足も山とある乃る書ま田う下 内枝
竹敷や足とせとる乃る書 一突
人笑乃あらふ位じ秋の月園 島

長るや屋敷乃月のまね草 休袴
目見さほ人乃直書指や大月面 袴
口くの指かよあや其本立 可休
うりふは神よとじやりる並 泉亭
かよあうく人よつんする草下 又咲
中庭の尻ふ老るやりや秋 夏歩
直敷乃秋指し秋ゆあう秋 塾士
直うあや我の眼く秋馬乃之 俣者

後を侍し

云いゆれと百目お乃色香下 扇

五

五

田乃草をたぎくおく直藤子 葦溪
丁半乃自雲角やかこはしり 絞
神をくそ氏おかりの紙帳賣 瑞
蚊の声乃七田知つ毛蚊屋の月 実
摺ららのありよりきさる蚊屋の 衆
妻おれとよれとてあふ其時 静
治事をとせぬもさくあおる 友
日さめりやかきふ鳴けを輝金声 泉
文集乃すくを勢一や桐乃花 花桂
不事おれとよれとてあふ其時 三 頁

ゆきまや藤まくくもてあふり 花風
夕まのほひあまや竹乃枝 如
夕らねねよとふゆさ益氣油 吟
色く乃風おりまらり山乃まき 琴
花さく志乃花屋とらや神乃花 舞
志乃もんめあ合との也造園 亭
花乃のれやとらとのあたらん 鼻
舞乃とくそ花乃名乃花屋 枕
口乃まくとくそ花乃名乃花屋 栗
所乃とくそ花乃名乃花屋 意

花風
如
吟
琴
舞
亭
鼻
枕
栗
意

そくめふりもめ母と具あは 我笑
惟子乃介の思あきや夕ととと 其之
猶呼ふ出とく娘の涙この所 因之
音あはれとけしとく長の涙をか 以惠
照月ふ羞とけしとく涙この所 毎
挨拶のふれと満らゆのこけし 一瓢
松つひと並ひと果とて涙を 車立
只通ふ人かまれなる法あは 一草
新乃子のうとけしとく果あは 浦

秋

飛鳥と書乃の葉しり秋の色 席用
今初ハ左物観よかといは葉を 羨西
相乃葉の理あはれとけしとく 幸白
暮れあのも物あはれとけしとく 車立
半全の存もうるをいふとて 席睡
架經ふ名因を序し物と袋 猶大
極あよ沙系佛屋をまらり 景
秋の初あはれとけしとく 其之
年もあはれとけしとく 其之

秋

えぬ入の吹風をゆるす所ふりて
葉を切りの物も透る時ふりて
あやうきなくも弱き時ふりて
あやうきなくも弱き時ふりて
あやうきなくも弱き時ふりて
あやうきなくも弱き時ふりて
あやうきなくも弱き時ふりて
あやうきなくも弱き時ふりて
あやうきなくも弱き時ふりて
あやうきなくも弱き時ふりて

十竹を種く

竹乃声許由心こまきし
と乃の鳥声も尾のぬり
おそふも福清おもまけぬ
山風の吹と何をるは
うつり香もつりや
海より月乃風也や
虫は秋の目も
温石ふれあはれ
新葉もあはれ

竹

竹

竹

ゆめを方終あめらの葉之下
 仲者
 音るや巨乃葉市の村日和
 伏角
 白葉ようく矢一昨の書雲酒ら
 空明
 是か六傳の苦う好の月
 念
 石新乃座も壱所一秋のあ
 其争
 智恵の河子影作とま一秋の言
 朱伯
 さり一さ乃扇然と流や浦の秋
 巴流
 抱いぬ佛と秋のすうあふ
 天咲
 本花乃泣きとるや麻の声
 百歩
 戸障子よ世の中持一秋のれ
 木宛

と終らうの巫とあし一秋送と
 止敬

みる

此内をたてさくはくも終り秋送
 天咲
 まことあ乃ちうく秋むや初あれ
 櫛志
 河をのひく筆切あ系あ葉下
 江器
 鳥乃葉と裸よしあ葉葉下
 文流
 葉の葉系あ極本乃作乞下
 何求
 笑止とといとぬ隣の葉葉下
 敬

眩を目も粧まればめは紫赤 完更
今菊ありて紫よは紫赤の紫赤 紫
藤乃母を紫赤くきき 苦乃花 土凡
空の道乃らちや紫赤の子乃は紫赤 青凡
二階く起てきききき 一乃紫赤 桃水
次乃名乃のひひひききき 一乃紫赤 其を
生来ききく口乃煙や初一乃終 一湯
うとて紫赤乃らち紫赤乃の紫赤 紫
奥乃紫赤の香も紫赤乃や初紫赤 島
紫赤乃乃人乃紫赤乃の 一乃紫赤 碩栗

山乃や松乃木身紫 一乃紫赤 奥疑
やとて紫赤乃存松乃志乃紫赤 百合
乃ら紫乃きねや紫赤乃人初紫赤 巴流
ゆ乃乃乃紫赤乃一乃紫赤 雷
初も紫赤乃紫赤乃松乃紫赤乃の 一乃
大根乃のらちや紫赤乃紫赤乃 紫雀
うら紫赤乃紫赤乃紫赤乃のり 一瓢
紫赤乃馬と紫赤乃紫赤乃の山 一尊
浅り乃紫赤乃初紫赤乃は紫赤乃 一
は乃乃乃目紫赤乃 一乃紫赤 佐角

きんく乃もまきまき村野 舟
ねんねいねも同じくねんねのね 舟
初言やそふ白ひのまきまき 舟
まの言や思ねん乃うす他松 榎
と付乃の心もまきまき今初言 榎
あはよまき思ねん乃うす初言 榎
初言ふ初言の思あひ思まき 一粟
あま思まき思ねん乃うす思 薨
風小根乃あはひ乃まき 貝錦
ひひまき思ねん乃まきあはひ 船松

空飛つてまき思ひ乃うす 舟上 舟
梢まき思ひ思ねん乃うす 舟 舟
空まき思ひ思ねん乃うす 舟 舟
楠巨小破や乃の言や後け 卷耳
風の中ふ一際も舟 舟 舟
うまき思ひ思ねん乃うす 舟 舟
目ハ鼻の下まき思ねん乃 舟 舟
志うら思ねん乃うす 舟 舟
一乃思ねん乃うす 舟 舟
言なけのまき思ねん乃うす 舟 舟

舟上

舟上

きまぬ事いそし掃りし海乃雪 鹿
割袴のわらふ影しや玉火燈 雀
ゆきまやちき流はる家竹乃宮 幸和
おき月夜合うがの影葉うた 祝
おきぬわらうし——枇杷の心 甚
お慶ま——して笑はる風下 意
樞戸をひそくおきるきりし 甚
親の恩わらるぬらぬとては 一睡
を先息乃海もはてしてきりし 泉
乃焼乃ゆも氷れをきりし 其

世とたのわらうとてきりし 鼻
お慶らとて雲乃曲もや年乃言 車立
おの系柱云傳やをよむり 俵水
お母乃海乃海りき京陣は 傘
妹とらとて櫻乃白——竹橋子 坊
とらとらぬ女乃智もや年乃言 夢
舞かきききききききききき 鹿
世乃海とて海もききききき 森
おきぬわらうし——竹橋子 笠
海とて海乃海もや年乃言 海

隣より一箇を餅乃名 松
の餅や日本の名も名 霜
餅乃名と小宮とく 鞠
赤松

鈍きもの命をーがーひ暮吉に国一
も小智の喜提のこゆひのさくら道
白鳳作をいふはー詞のなちりのあを
よたれうつらひと法行を易力理と
了知ー神方自らの通と行況は
立脚の業ーとと一盃の舟繪ようめ
の羊丸細工を二句の花雪にあら
外小遊するやーやーつれや日
つをーまーまの金拾やちやの

古今

八夜

予唯唯々々
行心平一多事

吉田氏依水



享保十年

乙巳九月吉日

京寺町二条下所

勘定治之丞板

